

酒井法子薬物事件の扇情報道に異議あり！

覚せい剤取締法違反で逮捕、起訴された酒井法子被告に対する扇情的な異常報道がやまない。その情報量は、この国の方向を決める大事な衆院選報道を上回るのではないか。この種の事件報道では主役を張るワイドショーTV(=芸能マスコミ)だけでなく、通常の一般ニュースでもひんぱんに取り上げられている▼この国のメディアがゴシップ報道に引きずられ、横並び体質なのは国家や国民性の反映なのかもしれない。僕の中にも、今回の事件に対するのぞき見的な、興味本位の報道に迎合してしまう心の動きは否定できない。でも、前回ふれたように、薬物事件は刑事罰を与えるだけでは問題は解決しないし、意志や根性も無力だ▼この間の報道では、検察サイドから小出しにリーク(耳打ち)される情報を膨らませ、これを何度も垂れ流している金太郎アメの映像に継ぎ足して新鮮さを装い、処罰感情を刺激する続報に血眼になる。総選挙の流れが民主党優位に傾くだけに、メディアを手玉に取ることで国民生活に直結する選挙報道を弱めようとする為政者側の政治的な意図が働いているのでは? と勘繰りたくなるほどだ▼同じ薬物事件ながら、その悪質性や事件の複雑さからすれば、合成麻薬MDMAを使用したとして麻薬取締法違反で逮捕、起訴された押尾学被告の事件報道にも、もっと時間が割かれていいはずだ。どうやらニュースに対する客観的な価値判断やバランス感覚よりも、視聴率を稼げる方が重大ニュースに仕立て上げられる現実があるようだ▼同じ芸能人でも遊び慣れたヤク中男より、清纯派だったトップアイドルが夫婦でシャブ漬けの墮落した生活をしていたとなれば、そのギャップを煽り立てる報道で視聴者ののぞき見趣味を十分に満足させられる。各メディアは今後、酒井被告の形式的な「反省裁判」「反省弁護」でも社会正義を盾に、そうした狂騒報道に躍起となるのだろう▼それにしても酒井被告は、つまらぬ男につかまったものだ。自称・プロサーファーで、都内の有名なスポーツショップの御曹司などと報道されたが、実像は事業家としての才覚などない単なるジャンキー(麻薬常習者)で、稼ぎがないから妻にたかるとどうしようもない男だ。そのために妻をシャブ中に仕立て上げたとしたら、ヤクザと何ら変わらない▼酒井被告にとって不幸の始まりが“できちゃった婚”だったこと

を考えれば、彼女の結婚人生は結局、この男に利用されたようなものだ。シャブで結ばれた夫婦という秘密を握り、ネタ（＝覚せい剤やコカインなど）を仕入れるための大事な金づるの妻を、ヤク中の夫が手離すはずはない。宙づり状態の夫婦関係の中で、何ら罪のない子どもが痛ましい▼酒井被告は当初、温かな家庭を思い描いていたのだろうが、彼女にはAC（アダルトチルドレン）やアディクションの典型的な世代連鎖を思い起こさせる部分がある。報道によれば、酒井被告は2歳で母親と死別し、継母らに育てられた。ヤクザだった父親はシャブにおぼれて組を破門、借金もあったという。結局はだめな父親と同じ、つまらぬ男を夫に選んでしてしまったようだ▼それらを踏まえると、彼女の更生や回復には相当な困難が付きまとうことが予想される。薬物依存症に加え、共依存の資質とどう向き合うかも重要な克服課題だろう。ダルク関係者がよく指摘するように、女性の薬物依存症者はなかなか回復が難しい。体が武器となるために、すっかり商品価値がなくなるまでは、なかなか「底突き」体験ができにくいからだ▼判決では有罪が免れないだろうが、なんとかダメージの少ない今のうちに酒井被告が底突きを経験し、なるべく早い段階で国内に数少ない女性ダルクにつながればいいのに、と切に願う。（市）

※筆者プロフィール＝市毛勝三（いちげ・かつみ）元地方紙記者。現在はフリージャーナリスト。ダルク支援者の一人で、薬物依存症問題などをテーマに据える。著書に「漂流の果てに」「我ら回復の途上にて」「少年犯罪論」など。コラムは随時掲載します。